



## 子どもは親の言うことを聞く存在か

### を問い直すこと(前編)

こどものこころの相談室 がじゅまる 臨床心理士 寺崎 真一郎

子育てで困っていると相談があることの多くは、「子どもが言うことを聞かない」とか、「子どもが親の指示通り動かない」というものと思います。今回は、「子どもと親の関係性」について、一緒に考えてみましょう。

※事例については、ご本人の許可をいただき、プライバシー保護のため内容を損なわない程度に改変しておりますこと、どうかご容赦ください。

私の相談室に3歳になった男の子(仮名サトル)を連れて、お母さんがやってきました。お母さんは切羽詰まった表情で「この子が全く言うことを聞かないので困っている、何かの障害ではないか」と訴えました。お母さんが訴えていたのは、サトルがおもちゃを出しっぱなしにして、お母さんが「片づけなさい」と言っても片付けないこと、チョロチョロと動き回るので落ち着きがないこと、お母さんが怒鳴ったり、優しく言ったりしても、全く打つ手がないといい、とにかくそういうことが積み重なってストレスが溜まっている、もう本当に辛いという気持ちを私にぶつけました。

お父さんはいますが、家を不在にすることが多く、家にいる時にお母さんが相談してもあまり育児には関心をもてないようでした。加えて、両親の親も遠方にいるので、誰かに助けを求めることもできず、実質お母さんが1人で子育てしているという状況だったのです。

お母さんはサトルの障害を疑ってあらゆる病院を受診していました。



私たちは、自分にフィットしないと判断すると、それを異質なものとして排除することで心の安定を図ります。障害という概念は、そういう「異質なものとして排除する」という論理に迎合しやすい性格を持っています。異質なものとして排除することは、とても気持ちが楽になるものです。子育ての現場でよく聞かれる「診断がついたことで楽になった」というエピソードは、まさにそういうことをよく表しているでしょう。



サトルのお母さんも子育ての悩みを抱え、診断を求めてあらゆる病院を受診していました。お母さんもしんどかったのだと思います。診断がつくことで、辛い気持ちから解放され、楽になりたかったのかもしれませんが。

結果的にサトルに診断がついたことで、お母さんは心の中で「サトルが親の言うことを聞けないのは、私が原因ではなく、サトルに障害があるから」という理解を得たようでした。

そして、継続していたお母さんとの面接も一旦、終わることになりました。

武田(2021)は、「やりすぎ教育～商品化される子どもたち」の著書の中で、昭和やそれ以前の時代は、兄弟姉妹が多く、そもそも子育てを親がする概念そのものが希薄だったこと、大日向(2000)も「母性愛神話の罫」の中で近代的な施策の一環として、「子どもの面倒を見るのは親である」ということを国民に浸透させる必要があったことを示唆しています。



つまり、これまでは親だけが子どもの面倒を見ていたのではなく、親の目の届かないことが当たり前で、乳母に育てられることもあるなど、**いろいろな人が子どもに関わっていた**ということです。武田(2021)は、現代の子育ての“**どんな子どもを育てたか**”ということが、「**親としての評価につながる**」という風潮に警鐘を鳴らしています。



この指摘が正しいなら、**どんな子どもを育てたかが評価される世の中であればあるほど、親は子どもをコントロールしたい、言うことを聞かせたいという欲にかられるのではない**でしょうか。

子どもは確かに、親(大人)の言うことを聞くことに喜びを感じるような時期があります。しかし、そのことが過度に要求されるならば、**こどもたちのこころも苦しくなってしまうのではない**でしょうか。

歌手である高橋優が「少年であれ」という楽曲の中で、「抱えきれない痛みは抱えなくてもいい」と歌いました。少し前の時代ならば、「抱えきれない痛みは、みんな・・・隣近所や地域の人たちも含めて・・・と抱えればいい～♪」(言葉のセンスがなさすぎて流行りませんね)と歌ったかもしれません。

ただ、「**辛いなら、抱えなくてもいい**」というメッセージは、地域やコミュニティとのつながりが切れ、ひとりで辛さを抱え、奮闘している多くの人にとって、「**抱えない方法もあるのだ**」という救いになったと思います。しかし、一方で“子育て”においては簡単に「抱えない」という方法をとれない“**ジレンマ**”も存在するのです。



子どもが成長していくプロセスは本来、苦しいものだけではないと私は思っています。ことばを話せなかった子どもがことばを少しずつ使えるようになること、「スパゲッティ」と言えずに「スパレッチー」と一生懸命に話そうとする子どもの姿に、何とも言えない愛らしさを感じたこともあるのではないかと思います。今の親が子育てに、より苦しさを感ずるのは、「子どもの責任を親が取る」という無言の圧力の中で、愛らしさを感じられないほど余裕を持ってないからと思うのです。

子育ては本来、辛いことだけではないのではないかと言いましたが、私はもう一度、一人一人の親が子育ての楽しさや辛さを抱え、味わっていけるような、みんな  
で抱えられる方法がないか、そんな風に考えられる世の中であって欲しいと思っています。

さて、今回のテーマは、「子どもは親の言うことを聞く存在かを問い直すこと(前編)」でした。この後、母親とサトルの関係性はどのように変化していったでしょうか。後編に続きます。



スクールカウンセラー事業として、毎月 1 回、滝上町内のこども園、小中学校を訪問し、お子さん・親御さんとお話しする時間を設けています。

ご相談を希望される方は、お子さんの通う滝上町内のこども園、小中学校または教育委員会へお問い合わせください。

#### ○参考文献

高橋優(2011)「少年であれ」ワーナーミュージック・ジャパン

武田信子(2021)「やりすぎ教育～商品化される子どもたち」ポプラ新書

大日向雅美(2000)「母性愛神話の罠」こころの科学業書

